

感動新聞

平成30年1月号 発行者 細川栄一

ビジネス経営の最前線で頑張っておられる方の役に立つ情報となればと思います。
喜んで頂ければ幸いです。
昨日、フエイズブックを見ていたらマルブンの眞鍋さんより、感動するエピソードがシェアされて
いましたから、1月の感動新聞の記事にしてみました。

高橋尚子が千葉マリンマソンで見た機転と美しさ(2018年1月22日マソン大会にて)

本来ならマソン大会翌日ですので、自分が走ったレポートを書くところですが、わたしの気持ちの昂
りはとても自分のレポートを書ける状態にありません。

わたしが目にした光景を文章にしないと、眠りにつくことすらできそうにありません。

事の発端は、わたしが千葉マリンマソンのゴール風景の写真を撮り終えて、別の取材のために都内に
向かおうと陸橋を上がっていたときでした。

ゴール前で最終ランナーを見送ったつもりだったのに、まだ選手が続々と歩道を走ってくるのが見えま
す。そういえば道路封鎖時間を過ぎたら、歩道を走るということになるといふことを思い出しました。



ところが、歩道を走っていたランナーの前には、走り終えたランナーたちが、ドリンクや参加賞をもらっ
ているエリアがあります。

わたしは一瞬「あたりタイアなのね」と思ったのですが、どうも様子がおかしいように感じます。ランナ
ーたちは、向かいからやってくるゴールしたランナーをかき分けて、ゴールエリアを目指します。

ただし、歩道を走ってきたランナーをゴールに誘導する人は一人もいません。歩道を走らせておいて、
歩道からのゴールまでのコース取りがされていませんでした。

実際には想定していたのだと思います。ただ千葉マリンマソンは今年だけ、NONOマリンスタジアムを
改修で使えないため、イレギュラーなコース設定とランナーの動線になっていました。



いつもと勝手が違ったのか、理由は定かではありません。いずれにしても歩道を走ってきたランナーのコースがなかったことは確かです。それも完走目標タイムの2時間55分に達する前の段階です。走ってきたランナーは、それぞれに自分でルートを探してゴールを目指します。

ああ千葉マリンマリンやっちゃったな「このときはそう思っただけで、海浜幕張駅に向かおうとしました。そこにのちゃんこと高橋尚子さんが、大勢のランナーを引き連れて戻ってきました。

のちゃんは誘導がないことに戸惑いながらも、自分でランナーを引っ張ってゴールを目指しました。



そして、引き連れた全員をゴールに導いたあと、ものすごい勢いでコースを引き返しました。わたしは急いではいたものの、「これはちょっと何かある」と感じて、陸橋から降りて高橋尚子さんの後を追います。

そこで見た光景は、高橋尚子さんが走ってくるランナー一人一人に「ごめんさい、ゴールがなくなった」と説明している姿でした。そしてその近くには、ボランティアさんが「コース完了(ゴールに入れません)」のフラカードを持って立っています。

この時点でもまだ設定されていた2時間59分になっていません。でもなぜか、大会側はレースを終了させました。

とてもお金をもらって開催している公認大会とは思えない対応でしたが、そこに不満をぶつけても仕方ありません。目の前では、あの高橋尚子さんがやってくるすべてのランナーに謝っています。



「ごめんさいゴールがなくなったので、わたしがゴールです」そう言って、ハイタッチをしながらランナーを止めていました。

そんなところを見て見ぬふりできるわけがありません。わたしも一緒になって お疲れさまです。ここで終わりです」とランナーに声をかけます。もちろんわたしがハイタッチをしても意味がありませんので、のちゃんからは2メートルくらい離れた場所からでしたが。

迎えられたランナーはキョトンとしています。だって、まだ2時間59分経過していないんですから。

そこで高橋尚子さんは、スタッフに頼んで、ゴールテープを持ってきてもらいました。完走はできなくても、そこをゴールにして、20kmの関門を通過したランナーを迎えたい。きれいな形で終わらせてあげたい。



そんな想いで用意してもらったのですが、ゴールテープが張られたことで、そこは本当にマラソン大会のゴールのようになりました。高橋尚子さんがそこにいるだけで、すでにゴールしたランナーが集まってきます。

あわよくば、一緒に写真を撮ってもらおうという人も続々とやってきます。〇ちゃんは嫌な顔ひとつせず、むしろ人が集まってくれるならという思いがあったのか、ランナーが途切れたタイミングで写真撮影に応じていました。

〇ちゃんがそこにいるから、人が集まる。そしてその人たちが、ゴールを目指してやってきた人たちに拍手を送ったり、頑張って」の声をかけます。

「これがマラソンだ」わたしの心が高鳴りました。



わたしはこれほどまでにランナーで良かったと感じたことはありません。自分がランナーだったからこそ、この光景に出会うことができました。こんな美しい光景は人生でそう何度も見れるものではありません。

そして、高橋尚子さんがどれだけマラソンを愛しているのか、それを強く感じました。

彼女は誰かに指示されて、この行動を取ったわけではありません。どのタイミングかは分かりませんが、自分がやらなきゃいけないと思って、ランナーを止める役割を引き受けました。

その証拠に、のちゃんはわたしに「本当に終わってるよね？わたしは勝手に止めてないよね？」と確認してきました。わたしに聞かれても困るのですが、プラカードが出ているわけですから、レースは終わっています。

誰かに指示されたなら、そんなこと確認するはずがありません。



そして、彼女は最後の一人までその場でランナーを待ち、時には数十メートル駆けて、手を繋いで一緒にゴールテープまで走っていました。

それをずっとそばで見えていましたが、彼女は「ま何をすべきか」という判断の速さと行動力、そして機転が利くという点で、明らかにわたしたち一般人とは違うものを持っていました。

ランナーを迎えるその背中の美しさに見とれているわたしがいました。

わたしはこれまで「石田ゆり子さんが好き」と何度も言ってきましたが、今日からは「石田ゆり子さんと高橋尚子さんが好き」に変えなくてはいけなさそうです。



わたしだけでなく、その場にいたすべての人が高橋尚子さんの行動に惹かれてしまったことでしょう。

これを書いているのが〇時を回る少し前なのですが、まだ胸のドキドキが収まりません。こんな素敵な光景に出会えたことを本当に感謝しています。

そして、この光景の中にいた一人として関わられたことを誇りに思います。(重松貴志ブログ記事より)

素敵を話だと思いませんか？

もし自分がその場にいたら最高に感動すると感じます。

彼女、高橋尚子さんはシドニーオリンピックで金メダルを獲得し、自分の目標を達成したのです。

でも、その後、彼女は悩み苦しみます。

周囲からの期待が大きくなり、以前のよう楽しく走ることが出来なくなりました。成績も以前のようにならなくなり、いかに苦しくなりました。

自分は何のために走るのか？

自問自答の日々が続いたようです。

その苦しみの中、見つけたのが自分の走る目的です。

一年ぶりとなる東京マラソンで、彼女が笑顔いっぱい楽しく走る姿が復活したのです。

「私が走ることで、日本のサラリーマンやOLさんに元気を届けたい」

その後の彼女の姿を見ると、市民マラソンのゴール地点では、何度も折り返し、一般ランナーと一緒にゴールする姿を目にします。素敵な生きざまですよね。